

むかし、あるところに、貧乏な男がおりました。男は、毎日、町へ花を売りに行つて暮らしていました。花が売れ残ると、帰りに川の中へ投げ入れて、おとひめさまにさしあげていました。

ある日のこと、いつものように、花を売って帰つて来ると、大水が出て川が渡れなくなっていました。

「はあて、こまった。これでは、うちに帰ることもできない」

男がこまつていると、不意に、水の中から大きなかめが現れて、「乗れ、乗れ」といいました。男は、ほつとして、かめの背中に乗りました。ところが、かめは、男を乗せて、見たことのない所へ泳いでいきました。男がびっくりして、

「ここはどこだ」ときくと、かめはいいました。

「ここは竜宮です。あなたがいつもおとひめさまに花をくださるので、そのお礼をしたいとおっしゃっています」

男が、

「そうかいな」と思っていると、おとひめさまが出て来ていました。

「おまえに、男の子をひとりやろう。この子は、はなは出ているし、よだれはたれているし、きたない子だが、大事にすると、のぞみは何でもかなえてくれる。おまえの子にせよ」

男が、

「この子の名前はなんというのですか」ときくと、

「名前は、とほうという」といいました。

男は、とほうをつれて、またかめの背中に乗つて、帰つて来ました。

男は、何よりもまず、きれいな家が欲しいと思いました。そこで、

「とほう、とほう。すまないけれど、きれいな家を出してくれないか」とたのみました。とほうは、目をつむつて、手を三度たたきました。そのとたん、見たこともないほどきれいな家が出ました。

「とほう、とほう。家は出たけれど、敷物がある。敷物を出してくれないか」というと、これも、すぐに出ました。

「とほう、とほう。こんどは、着物を出してくれないか」これも出ました。

「とほう、とほう。お金を出してくれないか」すると、千両箱が出ました。

男は、その千両で商売をして、たちまち大金持ちになりました。

五年もたつと、男は旦那さまになって、つき合ひも広くなり、あっちこっちのお屋敷によばれていきました。とほうは、そのたびに、男について行きました。男は、とほうがあんまりきたないので、こまつてしまいました。

ある日のこと、男はとほうにいいました。

「とほう、とほう。そのはなをかんではどうだ」

するととほうは、

「とてもかまれない」といいます。

「では、よだれをふいたらどうだ」

「とてもふけない」

「それじゃあ、着物を着かえたらどうだ」

「着かえることはできない」

男はすっかりこまってしまい、ある日、

「とほう、とほう。おまえ、何か好きな物はないか」とたずねました。とほうは、

「いいや、おら、なにも食べとうない」といいました。

「そうか。ついては、おまえにはえらく世話になったが、つごうで、ひまをやることにした。どうか、竜宮に帰ってくれないか」

男がいうと、とほうは、

「そうですか。しかたありません」といって、家を出て行きました。そのとたん、きれいな家は、たちまちもとのきたない家になり、着物も何もかも、もとのとおりになってしまうとき。

おしまい

原話…『昔話研究創刊号』「南蒲原郡昔話」 岩倉一郎／三元社
再話…村上郁